

音楽大学1年次におけるピアノ演奏技能の難易感： バロック・古典派・ロマン派・近現代それぞれの時代様式区分の印象から見られる傾向

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-21 キーワード (Ja): ピアノ演奏技能 キーワード (En): Piano Performance Skill 作成者: 門倉, 美香, 越智, 光輝, Kadokura, Mika, Ochi, Mitsuteru メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/693

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



音楽大学1年次におけるピアノ演奏技能の難易感

—バロック・古典派・ロマン派・近現代それぞれの時代様式区分の印象から見られる傾向—

A Feeling of Relative Difficulty of the Piano Performance Skill of the First Grader of College of Music :
The Tendency to Be Seen from the Impression of Each Era Style Categories of Baroque, Classical,
Romantic, Contemporary Classical Music

門倉美香 越智光輝
Mika Kadokura, Mitsuteru Ochi

1 はじめに

大学・短期大学等の高等教育機関（以後、大学）は人材育成と知的創造活動の中核と位置づけられている¹⁾。したがって、社会情勢の急速な変化やグローバル化及び本格的な人口減少社会を迎える我が国において、今後大学に求められる役割は益々重要になると考えられる。

大学は様々な機能²⁾を有しているが、どのような機能をどの程度有しているかが大学の特色を決定づける要因になっており、学科やコース等によって例外はあるものの、楽器演奏における専門的な知識や技能の修得を目的³⁾とする音楽大学では、それらの機能のうち「特定の専門的分野（芸術、体育等）の教育・研究」（文部科学省2005）に関連する機能について、その比重が大きくなっていると考えられる。そして、専門的な知識には、演奏する楽曲（作品）の楽譜として残されている部分を理解する知識だけではなく、その作品が作曲された時代背景や作曲手法、作曲家の人間的特徴といった作品に関連する部分の解釈及び理解も含まれている。したがって、優れた演奏を行うためには、音楽的技法の修得、作品の解釈の確立が必要とされている。

音楽的技法の修得及び作品の解釈の確立という目的を達成するために、音楽大学での実技指導において、基本的にはマンツーマンでの個人レッスンのスタイルを取り入れている。音楽大学に入学を許可された時点で、すでに一定以上の音楽的技法及び作品の解釈に必要な知識等の習得は完了してはいるものの、そこには当然個人差があり、このようなスタイルでの指導は学生一人ひとりのレベルに応じたレッスンを行えるという点で、非常に有効である。その後、定められた回数 of 個人レッスンを経て、音楽的技法の修得や作品の解釈の確立に関する進捗状況の確認及びその評価が行われる。その方法として実技試験が実施されるのが一般的であるが、学内での実技試験時に過剰に高い不安を感じている学生の存在について報告されている。

大学卒業時の成績は1年終了時の成績とほぼ一致していることが明らかとなっている。学生が過剰な不安を抱えたまま、もしくは不適切と考えられる指導を経て実技試験に臨んでしまうことで、実技試験での評価が学生にとって不本意な結果となってしまった場合には、学生の学修に対する意欲の低下を招

く恐れがあることも考えられる。したがって、1年次の学生への指導を行う際には、教員は特に細心の注意を払うことが必要である。

ピアノの演奏経験と演奏技術との間には関係があることが明らかになっており、1年次以降の指導を円滑に実施していくためにも、1年次における指導内容及び方法について検討することが重要と考える。

2 研究の目的と方法

2-1 研究の目的

ピアノ曲における音楽的技法を修得するためには、作曲された年代によりそれぞれの作品における演奏の手法が異なっていることを意識する必要がある。また、それらの手法の重要性については、演奏家としてのピアニストのみにとどまらず、幼稚園教諭や小学校教諭といった教員、さらには将来演奏家や教員を目指しピアノに関わっている学生にいたるまで、変わることはない。

洗足学園音楽大学ピアノコースにおける1年次前期の実技試験では課題曲として、Franz Joseph Haydn、Wolfgang Amadeus Mozart、及びLudwig van Beethovenの作品の中から1曲を任意に選択し演奏することが指定されており、1年次後期の試験から2年次後期の試験までに実施される3回の実技試験において、ロマン派、近現代、及び練習曲（J.S. バッハのインヴェンション・シンフォニア・平均律、ツェルニー40・50番練習曲、モシュコフスキー15の練習曲、ショパン・リスト・ラフマニノフ・スクリャービン・ドビュッシーいずれかの練習曲）の3つのカテゴリーすべてを網羅することが求められている⁴⁾。

よって本研究では、1年次の学生の、バロック、古典派、ロマン派、近現代これら4つの時代様式区分でのピアノ演奏における、ピアノ演奏に必要な技能である1. 姿勢、2. 腕の動き、3. 脱力、4. 指のタッチ、5. 指番号、6. ペダリング、7. 視線移動、8. 音色、9. 音質、10. 表現、これら10項目（以下、項目）の難易感について明らかにすることを目的とする。本研究の目的が明らかになることで、大学卒業時の成績に影響をあたえる1年次のピアノ学修への取り組みを円滑に行うための指導の一助とし、学生のニーズに対応した個人レッスンを展開することで、学生の学修成果が高まることが期待できる。

2-2 研究の方法

2-2-1 調査の対象と方法

調査対象：洗足学園音楽大学音楽学部ピアノコース専攻に在籍している1年次の学生を対象とした。

調査方法：質問紙調査を実施した。

調査実施期間：2017年6月5日より質問紙の配布を開始し、2017年7月3日までに回収を行った。

2-2-2 調査内容

それぞれの項目の難易感について調査を行った。バロック、古典派、ロマン派、近現代の4つの時代様式区分のピアノ曲を練習する際の難易感について、技能項目ごとに1. 易しい、2. やや易しい、3. どちらともいえない、4. やや難しい、5. 難しい、の5つの回答カテゴリーから1つを選択する質問項

目を記載した。時代様式区分の設定については、洗足学園音楽大学ピアノコースの実技試験の課題曲を参照した。また、実技指導教員等（以後、指導教員）の時代様式区分に対する認識と本研究における時代様式区分の定義との間に差異が生じた場合に、学生の混乱を招くことで学生の学修における不利益が発生する事態が生じる恐れがあるため、本研究ではそれぞれの時代様式区分の定義については提示していない。

2-2-3 分析方法

まず、項目の難易感に関する5つの回答カテゴリー（易しい、やや易しい、どちらともいえない、やや難しい、難しい）それぞれの回答数について時代様式区分ごとに算出し、記述統計により分析を行った。

次に、難易感について数値が大きいほど難度が高くなるように「易しい」に1点、「やや易しい」に2点、「どちらともいえない」に3点、「やや難しい」に4点、「難しい」に5点の難易度得点を付け、時代様式区分ごとに項目の難易度得点の平均（以下、平均得点）を算出した。さらに、平均得点に差があるかどうかを検証するために、独立変数を時代区分、従属変数を項目とする対応のある1要因の分散分析及び独立変数を項目、従属変数を時代区分とする対応のある1要因の分散分析をそれぞれ行った。

統計的分析にはIBM SPSS Statics V24.0 Media Packを用いた。

2-2-4 倫理的配慮

まず、調査対象学生（以後、学生）の指導教員に、調査の趣旨を説明し、調査への協力について指導教員から学生へ意思の確認を依頼した。次に、協力の意思が確認できた学生へ、指導教員を通じて質問紙の配布及び回収を依頼した。質問紙には、調査の目的、調査結果を論文作成等の研究に用いること、質問紙の提出が強制ではないことを記載した。また、氏名や学籍番号など個人が特定される質問項目は設けていない。

3 結果

3-1 回収数及び回収率

40部配布し40部を回収した（回収率100%）。未記入や誤答のあった3部を除いた37部について分析を行った。

3-2 時代様式区分における項目ごとの難易感

3-2-1 バロック

バロックにおける項目ごとの難易感について、表1及び図1に示した。

それぞれの項目で「難しい」「やや難しい」と回答した学生の人数は、姿勢3名、腕の動き15名、脱力19名、指のタッチ24名、指番号25名、ペダリング19名、視線移動11名、音色24名、音質23名、表現23名となり、2つの回答の占める割合が総和の50%を超えた項目は、脱力（51.3%）、指のタッチ（64.8%）、指番号（67.5%）、ペダリング（51.3%）、音色（64.8%）、音質（62.1%）、表現（62.1%）の7

つの項目であった。

表1 バロックにおける項目ごとの難易感

項目	易しい	やや易しい	どちらとも いけない	やや 難しい	難しい	合計
姿勢	5 (13.5)	7 (18.9)	22 (59.5)	1 (2.7)	2 (5.4)	37 (100)
腕の動き	2 (5.4)	5 (13.5)	15 (40.5)	12 (32.4)	3 (8.1)	37 (100)
脱力	2 (5.4)	5 (13.5)	11 (29.7)	15 (40.5)	4 (10.8)	37 (100)
指のタッチ	0 (0.0)	2 (5.4)	11 (29.7)	16 (43.2)	8 (21.6)	37 (100)
指番号	1 (2.7)	1 (2.7)	10 (27.0)	13 (35.1)	12 (32.4)	37 (100)
ペダリング	4 (10.8)	5 (13.5)	9 (24.3)	12 (32.4)	7 (18.9)	37 (100)
視線移動	2 (5.4)	6 (16.2)	18 (48.6)	8 (21.6)	3 (8.1)	37 (100)
音色	0 (0.0)	2 (5.4)	11 (29.7)	13 (35.1)	11 (29.7)	37 (100)
音質	1 (2.7)	1 (2.7)	12 (32.4)	11 (29.7)	12 (32.4)	37 (100)
表現	0 (0.0)	1 (2.7)	13 (35.1)	9 (24.3)	14 (37.8)	37 (100)

注. 単位は人。() は項目ごとの総和の%。

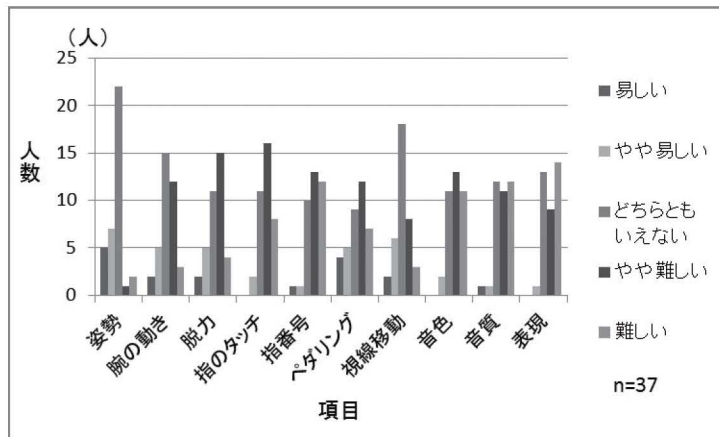


図1 バロックにおける項目ごとの難易感

3-2-2 古典派

四

古典派における項目ごとの難易感について、表2及び図2に示した。

それぞれの項目で「難しい」「やや難しい」と回答した学生の人数は、姿勢7名、腕の動き19名、脱力22名、指のタッチ25名、指番号13名、ペダリング19名、視線移動6名、音色26名、音質25名、表現27名となり、2つの回答の占める割合が総和の50%を超えた項目は、腕の動き(51.3%)、脱力(59.4%)、指のタッチ(67.5%)、ペダリング(51.3%)、音色(70.3%)、音質(67.5%)、表現(72.9%)の7つの項目で、表現は70%を超えた。項目数はバロックと同数の7であるものの、バロックでは40.5%だった「腕の動き」が、ロマン派では50.3%と50%を超えた。バロックで68.7%だった「指番号」

については、35.1%であった。

表2 古典派における項目ごとの難易感

項目	易しい	やや 易しい	どちらとも いえない	やや 難しい	難しい	合計
姿勢	5 (13.5)	2 (5.4)	23 (62.2)	5 (13.5)	2 (5.4)	37 (100)
腕の動き	1 (2.7)	4 (10.8)	13 (35.1)	11 (29.7)	8 (21.6)	37 (100)
脱力	1 (2.7)	4 (10.8)	10 (27.0)	13 (35.1)	9 (24.3)	37 (100)
指のタッチ	0 (0.0)	1 (2.7)	11 (29.7)	18 (48.6)	7 (18.9)	37 (100)
指番号	2 (5.4)	8 (21.6)	14 (37.8)	8 (21.6)	5 (13.5)	37 (100)
ペダリング	2 (5.4)	7 (18.9)	9 (24.3)	16 (43.2)	3 (8.1)	37 (100)
視線移動	2 (5.4)	6 (16.2)	23 (62.2)	4 (10.8)	2 (5.4)	37 (100)
音色	0 (0.0)	2 (5.4)	9 (24.3)	19 (51.4)	7 (18.9)	37 (100)
音質	0 (0.0)	1 (2.7)	11 (29.7)	18 (48.6)	7 (18.9)	37 (100)
表現	0 (0.0)	3 (8.1)	7 (18.9)	16 (43.2)	11 (29.7)	37 (100)

注. 単位は人。()は項目ごとの総和の%。

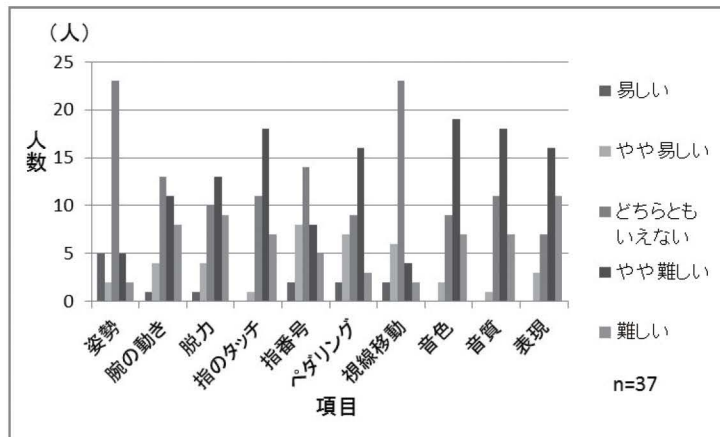


図2 古典派における項目ごとの難易感

3-2-3 ロマン派

ロマン派における項目ごとの難易感について、表3及び図3に示した。

それぞれの項目で「難しい」「やや難しい」と回答した学生の人数は、姿勢8名、腕の動き16名、脱力20名、指のタッチ25名、指番号19名、ペダリング21名、視線移動12名、音色26名、音質27名、表現29名となり、2つの回答の占める割合が総和の50%を超えた項目は、脱力(54.0%)、指のタッチ(67.5%)、指番号(51.3%)、ペダリング(56.7%)、音色(70.2%)、音質(72.9%)、表現(78.3%)の7つの項目であった。項目数はバロック及び古典派と同数の7であるものの、音色、音質、表現、これら3つの項目で70%を超えた。

表3 ロマン派における項目ごとの難易感

項目	易しい	やや 易しい	どちらとも いえない	やや 難しい	難しい	合計
姿勢	4 (10.8)	8 (21.6)	17 (45.9)	7 (18.9)	1 (2.7)	37 (100)
腕の動き	1 (2.7)	6 (16.2)	14 (37.8)	10 (27.0)	6 (16.2)	37 (100)
脱力	1 (2.7)	4 (10.8)	12 (32.4)	10 (27.0)	10 (27.0)	37 (100)
指のタッチ	0 (0.0)	2 (5.4)	10 (27.0)	16 (43.2)	9 (24.3)	37 (100)
指番号	1 (2.7)	4 (10.8)	13 (35.1)	15 (40.5)	4 (10.8)	37 (100)
ペダリング	0 (0.0)	7 (18.9)	9 (24.3)	15 (40.5)	6 (16.2)	37 (100)
視線移動	2 (5.4)	0 (0.0)	23 (62.2)	11 (29.7)	1 (2.7)	37 (100)
音色	0 (0.0)	4 (10.8)	7 (18.9)	12 (32.4)	14 (37.8)	37 (100)
音質	0 (0.0)	3 (8.1)	7 (18.9)	13 (35.1)	14 (37.8)	37 (100)
表現	0 (0.0)	3 (8.1)	5 (13.5)	12 (32.4)	17 (45.9)	37 (100)

注. 単位は人。() は項目ごとの総和の%。

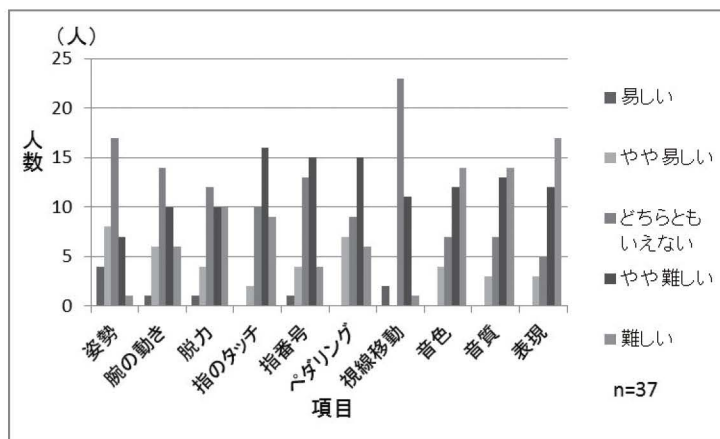


図3 ロマン派における項目ごとの難易感

3-2-4 近現代

近現代における項目ごとの難易感について、表4及び図4に示した。

六

回答者はすべての項目で37名であった。それぞれの項目で「難しい」「やや難しい」と回答した学生の人数は、姿勢7名、腕の動き25名、脱力22名、指のタッチ22名、指番号23名、ペダリング22名、視線移動15名、音色26名、音質25名、表現29名となり、2つの回答の占める割合が総和の50%を超えた項目は、腕の動き(67.5%)、脱力(59.4%)、指のタッチ(59.4%)、指番号(62.1%)、ペダリング(59.4%)、音色(70.2%)、音質(67.5%)、表現(78.3%)の8つの項目であった。

姿勢及び視線移動、これら2つの項目については、バロック、古典派、ロマン派、近現代いずれの時代区分でも、「難しい」もしくは「やや難しい」と回答した学生の割合が、50%以上にならなかった。

表4 近現代における項目ごとの難易感

項目	易しい	やや易しい	どちらとも いけない	やや 難しい	難しい	合計
姿勢	4 (10.8)	6 (16.2)	20 (54.1)	5 (13.5)	2 (5.4)	37 (100)
腕の動き	2 (5.4)	4 (10.8)	6 (16.2)	17 (45.9)	8 (21.6)	37 (100)
脱力	1 (2.7)	2 (5.4)	12 (32.4)	13 (35.1)	9 (24.3)	37 (100)
指のタッチ	1 (2.7)	2 (5.4)	12 (32.4)	14 (37.8)	8 (21.6)	37 (100)
指番号	1 (2.7)	4 (10.8)	9 (24.3)	11 (29.7)	12 (32.4)	37 (100)
ペダリング	1 (2.7)	2 (5.4)	12 (32.4)	13 (35.1)	9 (24.3)	37 (100)
視線移動	1 (2.7)	2 (5.4)	19 (51.4)	7 (18.9)	8 (21.6)	37 (100)
音色	1 (2.7)	3 (8.1)	7 (18.9)	14 (37.8)	12 (32.4)	37 (100)
音質	1 (2.7)	3 (8.1)	8 (21.6)	15 (40.5)	10 (27.0)	37 (100)
表現	0 (0.0)	2 (5.4)	6 (16.2)	13 (35.1)	16 (43.2)	37 (100)

注. 単位は人。() は項目ごとの総和の%。

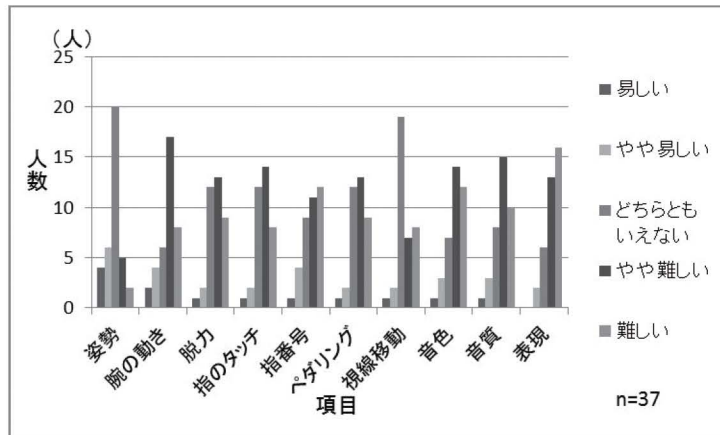


図4 近現代における項目ごとの難易感

3-3 項目ごとの平均得点

項目ごとの難易感について、数値が大きいくほど難度が高くなるように「易しい」を1点、「やや易しい」を2点、「どちらともいけない」を3点、「やや難しい」を4点、「難しい」を5点とする難易度得点を付け、平均得点（難易度得点の平均）を算出した（表5及び図5参照）。

項目ごとの平均得点はバロック、古典派、ロマン派、近現代の順番に、姿勢では2.68、2.92、2.81、2.86、腕の動きでは3.24、3.57、3.38、3.68、脱力では3.38、3.68、3.65、3.73、指のタッチでは3.81、3.84、3.86、3.70、指番号では3.92、3.16、3.46、3.78、ペダリングでは3.35、3.30、3.54、3.73、視線移動では3.11、2.95、3.24、3.51、音色では3.89、3.84、3.97、3.89、音質では3.86、3.84、4.03、3.81、表現では3.97、3.95、4.16、4.16だった。

表5 項目の平均得点

項目	バロック 平均得点	古典派 平均得点	ロマン派 平均得点	近現代 平均得点
姿勢	2.68 (0.94)	2.92 (0.98)	2.81 (0.97)	2.86 (0.98)
腕の動き	3.24 (0.98)	3.57 (1.04)	3.38 (1.04)	3.68 (1.11)
脱力	3.38 (1.03)	3.68 (1.06)	3.65 (1.09)	3.73 (0.99)
指のタッチ	3.81 (0.84)	3.84 (0.76)	3.86 (0.86)	3.70 (0.97)
指番号	3.92 (0.98)	3.16 (1.09)	3.46 (0.93)	3.78 (1.11)
ペダリング	3.35 (1.25)	3.30 (1.05)	3.54 (0.99)	3.73 (0.99)
視線移動	3.11 (0.97)	2.95 (0.85)	3.24 (0.76)	3.51 (0.99)
音色	3.89 (0.91)	3.84 (0.80)	3.97 (1.01)	3.89 (1.05)
音質	3.86 (1.00)	3.84 (0.76)	4.03 (0.96)	3.81 (1.02)
表現	3.97 (0.93)	3.95 (0.91)	4.16 (0.96)	4.16 (0.90)

注. () は標準偏差。平均得点及び標準偏差は小数第3位を四捨五入。

バロック、古典派、ロマン派、近現代、いずれも n=37。

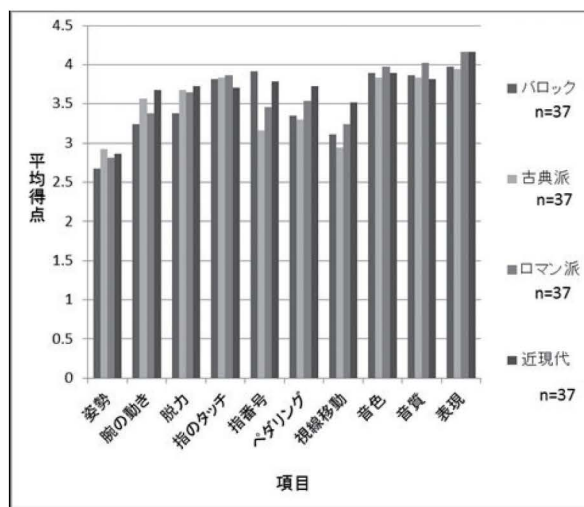


図5 項目の平均得点

3-4 平均得点の比較

3-4-1 項目ごとの平均得点の比較

バロック、古典派、ロマン派、近現代のそれぞれの時代様式区分ごとに、項目の平均得点に差があるかどうか検証するために、独立変数を時代区分、従属変数を項目とする対応のある1要因の分散分析を行った。

その結果、バロックでは項目の主効果が認められた ($F(5.855, 210.778) = 10.97, MS_e = 0.987, p < .01$: Greenhouse-Geisser により調整)。ボンフェローニの方法による多重比較を行ったところ、脱力及び音質の平均得点は、姿勢の平均得点に対し有意に高いことが認められた ($p < .05$)。指のタッチ、指番号、音色、表現それぞれの平均得点は、姿勢、腕の動き及び視線移動の平均得点に対し有意に高いことが認められた ($p < .05$)。

古典派では項目の主効果が認められた ($F(4.748, 170.918) = 8.941, MS_e = 1.2, p < .01$: Greenhouse-Geisser により調整)。ボンフェローニの方法による多重比較を行ったところ、腕の動き及び脱力の平均得点は、姿勢の平均得点に対し有意に高いことが認められた ($p < .05$)。音質の平均得点は、姿勢及び視線移動の平均得点に対し有意に高いことが認められた ($p < .05$)。指のタッチ、音色、表現それぞれの平均得点は、姿勢、指番号及び視線移動の平均得点に対し有意に高いことが認められた ($p < .05$)。

ロマン派では項目の主効果が認められた ($F(4.707, 169.445) = 11.017, MS_e = 1.093, p < .01$: Greenhouse-Geisser により調整)。ボンフェローニの方法による多重比較を行ったところ、腕の動き、脱力、指番号、ペダリングそれぞれの平均得点は、姿勢の平均得点に対し有意に高いことが認められた ($p < .05$)。指のタッチ、音色、音質それぞれの平均得点は、姿勢及び視線移動の平均得点に対し有意に高いことが認められた ($p < .05$)。表現の平均得点は、姿勢、腕の動き及び視線移動の平均得点に対し有意に高いことが認められた ($p < .05$)。

近現代では項目の主効果が認められた ($F(4.399, 158.363) = 6.693, MS_e = 1.26, p < .01$: Greenhouse-Geisser により調整)。ボンフェローニの方法による多重比較を行ったところ、腕の動き、脱力、指のタッチ、指番号、ペダリング、視線移動、音色、音質それぞれの平均得点は、姿勢の平均得点に対し有意に高いことが認められた ($p < .05$)。表現の平均得点は、姿勢、視線移動及び音質の平均得点に対し有意に高いことが認められた ($p < .05$)。

3-4-2 時代様式区分ごとの平均得点の比較

項目の平均得点が、時代様式区分 (バロック、古典派、ロマン派、近現代) によって差があるかどうか検証するために、独立変数を項目、従属変数を時代区分とする対応のある1要因の分散分析を行った。

時代区分の主効果が認められた項目は、腕の動き ($F(3, 108) = 3.154, MS_e = 0.436, p < .05$)、指番号 ($F(2.467, 88.801) = 6.898, MS_e = 0.751, p < .01$: Greenhouse-Geisser により調整)、視線移動 ($F(1.981, 71.299) = 6.571, MS_e = 0.492, p < .01$: Greenhouse-Geisser により調整) であった。

主効果の認められた項目についてボンフェローニの方法による多重比較を行ったところ、腕の動きでは有意な差のある組み合わせは認められなかった。指番号ではバロック及び近現代の指番号の平均得点

は、古典派の指番号の平均得点に対し有意に高いことが認められた ($p < .05$)。視線移動ではロマン派及び近現代の視線移動の平均得点は、古典派の視線移動の平均得点に対し有意に高いことが認められた ($p < .05$)。

姿勢 ($F(3, 108) = 1.474, n.s.$)、脱力 ($F(2.431, 87.503) = 1.974, n.s.$, Greenhouse-Geisserにより調整)、指のタッチ ($F(3, 108) = 0.442, n.s.$)、ペダリング ($F(2.129, 76.648) = 1.736, n.s.$, Greenhouse-Geisserにより調整)、音色 ($F(2.079, 74.835) = 0.212, n.s.$, Greenhouse-Geisserにより調整)、音質 ($F(3, 108) = 0.621, n.s.$)、表現 ($F(3, 108) = 0.982, n.s.$) では時代区分の主効果は認められなかった。

4 考察

4-1 バロック

項目の平均得点に差があるかどうか検証した結果、項目の主効果が認められた。全ての組み合わせに有意差は認められなかったものの、バロックのピアノ曲を演奏する際に、項目により学生の難易感に影響を受けていると考えられる。

項目の平均得点は、表現が最も高く、次いで指番号、音色、音質、指のタッチ、脱力、ペダリング、腕の動き、視線移動、姿勢と低くなる傾向が見られた。また、項目の平均得点が、時代区分によって差があるかどうか検証した結果、指番号ではバロックの平均得点は古典派の平均得点に対し有意に高い(難度が高い)ことが認められた。

いずれの時代様式区分においても表現の平均得点については最も高い傾向が見られているが、バロック以外の時代様式区分の指番号における平均得点はバロックほど高い傾向が見られない。バロックにおけるピアノ曲は、本来は現在のピアノのために作曲されたものではなく、当時は鍵盤の幅なども楽器によって異なっていた。そのため、演奏時における運指についても統一された運指法が確立していたものの、奏者が演奏する楽器によって細かな修正等が行われていたと考えられる。1年次前期における実技試験では、古典派の作曲家によるピアノ曲が課題となっているため、質問紙調査実施時点において、学生の多くが古典派のピアノ曲の学修に取り組んでいると推測される。したがって、古典派のピアノ曲を学修した後にバロックのピアノ曲に取り組む場合には、学生の指番号に対する意識、知識、技能等をどの程度有しているかについて、指導教員は正確に把握するとともにその程度に応じた適切な指導を行うことが求められると考える。また、ポリフォニーやホモフォニーといった作曲様式における表現の違いについて、学生がどのような考えを持っているかについて明らかにすることが必要であろう。

4-2 古典派

項目の平均得点に差があるかどうか検証した結果、項目の主効果が認められた。全ての組み合わせに有意差は認められなかったものの、バロックと同様に古典派のピアノ曲を演奏する際にも、項目により学生の難易感に影響を受けていると考えられる。

項目の平均得点は、表現が最も高く、次いで3.84で指のタッチ、音色及び音質、脱力、腕の動き、

ペダリング、指番号、視線移動、姿勢と低くなる傾向が見られ、表現、音色、指のタッチについては、いずれも指番号の平均得点に対し有意に高かった。また、項目の平均得点が、時代区分によって差があるかどうか検証した結果、指番号では古典派の平均得点はバロック及び近現代の平均得点に対し有意に低い（難度が低い）こと、視線移動では古典派の平均得点はロマン派及び近現代の平均得点に対し有意に低いことが認められた。

学生が古典派のピアノ曲の学修に取り組む際には、バロックと異なり音色を中心とした表現方法について難度が高いと感じていると考えられる。したがって、指のタッチ、脱力、腕の動きといった身体の使い方についての指導の方法について、指導教員は十分に検討を行うことが重要だと考えられる。これらの身体の使い方の変化によって、音色及び音質にどのような影響を及ぼすのか、その特徴や傾向、内容等について、指導教員が学生に説明する機会が生じることが推測される。言葉を用いての指導、言葉を使わずに指導教員による実際の演奏の視聴による指導、さらには、タブレット端末等を使用して指導教員、学生、それぞれ動画を撮影しそれらの動画の比較による指導といった、学生によって最も理解しやすい指導方法を選択することが重要だと考えられる。

4-3 ロマン派

項目の平均得点に差があるかどうか検証した結果、項目の主効果が認められた。バロック、古典派と同様に、ロマン派においても、全ての組み合わせに有意差は認められなかったものの、項目により学生の難易感は影響を受けていると考えられる。

項目の平均得点は表現が最も高く、音質、音色、指のタッチ、脱力、ペダリング、指番号、腕の動き、視線移動、姿勢と低くなる傾向が見られたが、腕の動き、脱力、指番号、ペダリングそれぞれの平均得点は、姿勢の平均得点に対し有意に高いこと、指のタッチ、音色、音質それぞれの平均得点は、姿勢及び視線移動の平均得点に対し有意に高いこと、表現の平均得点は、姿勢、腕の動き及び視線移動の平均得点に対し有意に高いことが、それぞれ認められた。

また、項目の平均得点が、時代区分によって差があるかどうか検証した結果、視線移動ではロマン派の平均得点は古典派の平均得点に対し有意に高いことが認められた。

ロマン派の項目における平均得点と古典派の平均得点は類似した傾向が見られており、古典派のピアノ曲を学修した後にロマン派のピアノ曲に取り組んだ場合には、バロック、近現代のピアノ曲とは異なり、学生の円滑な学修を展開しやすいことが推測される。しかし、視線移動ではロマン派の平均得点は、古典派の平均得点に対し有意に高く、有意差は認められないがペダリングの平均得点についてもロマン派は古典派より高い傾向が見られる。これは、ロマン派の音楽の特徴として挙げられる、長いフレーズ及びその中で用いられる音型の複雑化、近親調だけでなく遠隔調への転調の多用、こまめな転調による調性感の弱まりによって生じる頻繁な音の跳躍といった要因によるものと考えられる。さらに、これらの転調によって、それぞれの音の持つ役割や意味を理解することの難度が高くなるために、音色及び音質の平均得点が古典派の平均得点より高い傾向が見られていると考えられる。したがって、古典派のピアノ曲からロマン派のピアノ曲への円滑な学修の展開を行うためには、指導教員は楽曲で用いられている音について、用いられている部分での調性や和音におけるそれぞれの役割及びそれらの役割に基

づいた表現方法について指導していく必要があると考えられる。

4-4 近現代

項目の平均得点に差があるかどうか検証した結果、項目の主効果が認められた。全ての組み合わせに有意差は認められなかったものの、近現代においても他の時代様式区分と同様に、項目によって学生の難易感に影響を受けていると考えられる。

項目の平均得点は表現が最も高く、音色、音質、指番号、ペダリング及び脱力、指のタッチ、腕の動き、視線移動、姿勢と低くなる傾向が見られ、姿勢の平均得点は他の全ての項目に対し有意に低いこと、表現の平均得点は、姿勢、視線移動及び音質の平均得点に対し有意に高いことが認められた。

また、項目の平均得点が、時代様式区分によって差があるかどうか検証した結果、指番号では近現代の平均得点は古典派の平均得点に対し有意に高いこと、視線移動では近現代の平均得点は古典派の平均得点に対し有意に高いことが認められた。

近現代のピアノ曲では、視線移動はロマン派と同様に古典派より難度が高く、また、指番号についてもバロックほどではないものの古典派よりは高くなっている。したがって、学生が古典派のピアノ曲を学修した後に近現代のピアノ曲に取り組んだ場合には、視線移動及び指番号の指導について指導教員は十分に検討を行うことが必要だと考えられる。また、近現代の楽曲では、調性や小節、拍子についての定義を含め作曲家によってその作曲技法に大きな違いが見られることもあるため、用いられた作曲技法に適した演奏及び表現の方法について、指導することが求められる。

4-5 時代様式区分全体での項目ごとの傾向

時代様式区分全体での項目ごとの平均得点の傾向は、A～Cの3つのタイプに大別される。

Aタイプはバロックが最も低い傾向にある。このタイプには、姿勢、腕の動き、脱力の3つの項目が該当する。

Bタイプは古典派がバロックより低くロマン派は近現代より低い傾向にある。さらに、このタイプはロマン派がバロックより低い（B-1）、ロマン派がバロックより高い（B-2）2種類に分類される。B-1は指番号が、B-2ではペダリング及び視線移動が該当する。

Cタイプは、上記の2つのタイプに該当しない傾向が見られる項目で、指のタッチ、音色、音質、表現が該当する。

指導を行う際には、項目がどのタイプに該当するか十分に考慮し、時代様式区分における学生の修得の度合いにも十分配慮する必要があると考えられる。

5 まとめ

作品の音楽理論及び文化的歴史的背景の分析を通じて、音楽の持つ感情やイメージについてどのように表現するか、指導教員は学生に対してその表現方法を指導すると同様に、人間の身体の構造やピアノ演奏時における身体の動きやその変化についても指導する必要がある。また、指導教員による指導を通

じて、学生自らが、自身にとって最善と考えられる表現方法や身体の使い方について探求し続けることが重要である。

本研究を通じて、それぞれの時代様式区分での、音楽大学1年次における学生のピアノ演奏技能の難易感について、その傾向が示唆された。これらの知見の中には指導教員各自によるこれまでの指導経験によって、感覚的に捉えられていた部分も含まれていると推測されるが、優れた演奏を行うために必要となる音楽的技法を修得するための指導を行う上で、その指導対象を音楽大学1年次の学生と特定した場合には、その指導方法を検討する際の一助になると考えられる。

今後の課題として、次の3点が挙げられる。第1に、作曲された時代や年代に加え、作曲の様式についても考慮した分類を行い調査する必要があると考えられる。本研究ではバロック、古典派、ロマン派、近現代という4つの時代様式区分に分類を行ったが、作曲の様式も考慮した分類による調査を行うことで、それぞれの時代様式区分による項目の難易感の違いが、さらに明確になることが期待できる。第2に、ピアノ演奏に必要な技能に関するそれぞれの項目について、より詳細に調査を行う必要があると考えられる。本研究では、先行研究を参考にピアノ演奏に必要な技能に関する項目の難易感について調査を行ったが、それぞれの項目において具体的にどのような部分が学生は難しいと感じているか明らかにすることで、より一層充実した指導を展開していくことが可能になるであろう。第3に、学生の項目の難易感の変化について継続して調査を行うことが必要である。本研究において質問紙調査を実施した時点では、ほぼ全ての学生が古典派の曲の修得に取り組んでいることが見込まれ、また、学生の不利益になる事態を考慮し、時代様式区分についての提示していない。したがって、実技レッスンやその他の授業を通じて、時代様式区分に関する知識を修得することで学生のピアノ演奏技能の難易感は変化することが推測される。

本研究によって得られた知見をもとに、大学卒業時の成績に影響を与える1年次における学修について、その成果を高めるための指導を行うことは重要である。しかし、最善の指導を行うためにはその内容について常に改善していくことが求められる。したがって、学生の難易感に関する調査を継続して行い、その変化について明らかにすることで、指導における改善点の検討を行う際の一助になると考えられる。

注

- 1) 文部科学省 2017 我が国の高等教育に関する将来構想について(諮問)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1383080.htm (2017.08.04 参照)
- 2) 文部科学省 2005 「第2章 新時代における高等教育の全体像」『我が国の高等教育の将来像(答申)』
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335594.htm (2017.08.10 参照)
- 3) 洗足学園音楽大学「教育情報」『大学案内』
<http://www.senzoku.ac.jp/music/about/pdf/data/2017/purpose2.pdf> (2017.08.08 参照)
- 4) 平成29年度「ピアノ奏法研究」実技試験について ピアノ部会 [2017/02/28]
<https://portal.senzoku.ac.jp/up/faces/up/po/Poa00601A.jsp> (2017.07.29 参照)

引用文献

文部科学省 2005 「第2章 新時代における高等教育の全体像」『我が国の高等教育の将来像 (答申)』
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335594.htm
(2017.08.10 参照)

参考文献

- Petter Coraggio 編・坂本暁美/坂本示洋訳 2005 『ピアノ・テクニックの基本』音楽之友社
- 桑田繁・坂上ルミエ 1995 「女子音大生のピアノ演奏不安に及ぼす系統的脱感作法の効果」『日本教育心理学会総会発表論文集』37 198.
- 三浦雅展・宮脇聡史 2015 「ピアノ演奏の熟達度評価基準を対象とした経験者および未経験者での評価の共通性と多様性」『日本音響学会 音楽音響研究会資料』34 (3) 25-30
- 中村紗和子 2015 「保育者養成校におけるピアノ指導に関する一考察 — 「音楽の要素」「演奏の技能」を観点に指導方法の比較を通して—」『九州大学紀要』第52巻2号 89-103
- 大島千佳・西本一志・小長谷 明彦 2000 「ピアノ指導方法の差異が及ぼすピアノ学習への影響について」『情報処理学会研究報告: ヒューマンインタフェース研究会報告』(94) 77-84
- 上杉恵子 2016 「大学成績: 1年で決まる? 卒業時と一致 東京理科大調査」『毎日新聞』2016年6月3日 08時00分 (最終更新 6月3日 11時10分)
<https://mainichi.jp/articles/20160603/k00/00m/040/141000c> (2017.07.29 参照)